

日韓の深淵—盧泰愚さんの時代②

立命館大学コリア研究センター上席研究員 波佐場 清

1. 日本の支配が遺したもの

日本の植民地時代に日本人教師の教えを受けた世代には解放後も、旧師への敬愛の念を語る韓国人は少ない。私自身、新聞記者として7年ほど韓国に滞在していた間、そんな人に何人も会った。大統領になった人の場合も、日本人旧師を慕ったのは盧泰愚さんだけではなかった。

■「生涯、教えを胸に刻んだ」

朝鮮半島の南北和解や韓国の民主化に貢献し、ノーベル平和賞を受けた金大中さん（1924～2009年／大統領在任1998～2003年）は、その「自伝」で何人かの日本人教師について書いているが、好印象を持った先生が多かったようだ。とくに木浦商業学校3年生（1941年）のときの担任には大きな感化を受けた、と次のような述懐をしている。

野口甚六という先生だった。「原則は確固と守るべきだ」と教えられた。それでいて、実際において柔軟でなければ勝利者にはなれない、とも諭された。感受性の強い青年期の私は大きな感銘を受け、生涯その教えを胸に刻んだ。原則を守りながらも、方法において柔軟な「实事求是」（金大中さんは「座右の銘」と語っていた——筆者注）の生き方をその時に学んだ。



青瓦台 HP 小渕首相と握手する金大中大統領（1998年）

■「教頭先生はすばらしい、立派な方だった」

やはり韓国の民主化運動をリードした、金大中さんの前任の大統領金泳三さん（1927～2015年／在任1993年～98年）も植民地時代末期の中学校時代のことについて、朝日新聞の箱田哲也ソウル支局長（当時）のインタビューに次のように語っていた。

「キタジマという校長がいて、朝礼で30分話すうち25分が韓国の悪口。本当に悪い人だった。一方でワタナベという教頭先生は本当にすばらしい人で、韓国人、日本人をまったく区別しない立派な人でした」

「私が国会議員になった時、ワタナベ先生を韓国に招きました。当時最も立派だったホテルを用意した。……先生は感激して泣いてくれて、亡くなられた後は、大阪に住むご家族を大統領府に招待しました」（2010年1月27日付朝日新聞オピニオン面）

金泳三さんが渡辺巽先生を韓国に招いたのは日韓正常化前の 1955 年のことだった。韓国を訪れる日本人はほとんどいなかった、そんな時代に金泳三さんは 2 週間にわたりこの旧師をソウル、慶州、統営などに案内した。



青瓦台 HP 細川首相と握手する金泳三大統領（1993 年）

■曲解？

朝鮮人の民族性抹殺を意味した「皇国臣民化」教育。盧泰愚さんに限らず、のちに大統領となった少年たちは辛い体験も記憶していた。金大中さんは「自伝」の中で、次のようなことを書いている。

学校では日本語だけしか使えなかった。そんなある日、父が学校に来た。運動場に立っていた父のそばへ行ったが、（父は日本語ができなかったので）話すことができなかった。父も何も言わなかった。…

私は小さい声で言った。「お父さん、帰りましょう。家で話してください」。朝鮮人が朝鮮語をしゃべれないとは、考えれば、考えるほど、息の詰まる世の中だった。父は家に帰っても何も言わなかった。

それでいて、口々に語る旧師への思慕の念。国と国が支配—被支配の関係にあったとはいえ、民衆レベルの人と人の関係はそれを超越しうるといふことなのだろうか。盧泰愚さんは『回顧録』のなかで、「真からの人間愛は国境を越える」と書いている。

しかし、長い歴史と伝統のある他国を支配し、言葉も名前も奪うという正気の沙汰とも思えぬ同化政策がそれによって免罪符を与えられるということにはならないだろう。韓国より長い期間、同様の同化政策を強いられた台湾の政治活動家、黄昭堂さん（1932～2011年）はその著書『台湾総督府』（ちくま学芸文庫）で、次のように指摘している。

戦後、台湾人が親日的傾向に転じたのは、かつて自分たちが教えを受けた国民学校をはじめとする各級学校の教師への敬愛の念がそうさせたのであり、それを、「日本の統治がよかったからだ」と曲解する日本人が多いのは、きわめて残念なことである。

■手本は二宮金次郎…

日本の朝鮮植民地支配は解放後も韓国に深い傷痕を残した。日本が抹殺しようとした民族のアイデンティティをどう取り戻すか。それが最も深刻な問題の一つだった。それは今も、「日帝の残滓」という言い方で、しばしば俎上にあがる。

その深刻さを私に気づかせてくれた一冊に、柳周鉉著、朴容九訳の『小説 朝鮮総督府』がある。1967年に韓国で出版されて反響を呼び、翌68年、講談社から翻訳出版された上中下3巻本である。

タイトル通り、朝鮮総督府に焦点を当て、日本の統治実態に切り込んでいる。寺内正毅、斎藤実、宇垣一成、南次郎といった歴代総督や総督府高官、抵抗運動をする朝鮮人らを実名で登場させ、数々の歴史資料や記録を駆使してドキュメンタリー風書いている。

ラストシーンが強く印象に残った。1945年8月16日、つまり日本の敗戦で韓国が解放された、その翌日のソウルの街角の情景を描いている。以下の通りだ。

終日、うきうきした気持ちで街をさまよって、日暮れどきになってやっとわが家のある嘉会洞の路地へ踏み入った。

子どもたちが遊んでいた。

六、七歳の幼い女の子たちが<オジャミ>と呼ぶ日本式のお手玉遊びをしている。布でこしらえた四つの小豆の小袋を両手でかわるがわる打ち上げながら、首をコックリコックリやりながら、歌をうたっている。

柴刈り縄ない、わらじをつくり

親の手を助け仕事を励み（ママ）

兄弟なかよく、孝行つくす

手本は、二宮金次郎……

心ない子どもたちの歌をききながら尹貞恵は溜息をついた。

日本人の二宮金次郎でなければこのくにの幼い者たちが手本にする人物はいないというのであろうか。

ほんとうに幼い者たちの手本になる人物がこのくにはいないのだろうか。

——方向感覚を失ったわれらの幼い蕾たちよ。

尹貞恵の目からは、なぜか涙があふれて流れ落ちた。…

ここに登場する尹貞恵なる人物はこの小説で狂言回しの役目を担わせている女性で、この8月16日朝、全国で一斉に解き放たれた政治思想犯の一人としてソウルの西大門刑務所から出てきたばかりという設定である。

文部省唱歌だった「二宮金次郎の歌」は、私も幼いころに聞いた記憶がある。やはり、近所の女の子たちが「オジャミ」をしながら歌っていたと思う。



『小説 朝鮮総督府』

■引きずる「日帝の残滓」

『小説 朝鮮総督府』の作者柳周鉉氏（1921～82年）は京畿道驪州生まれ。早稲田大学で学び、解放前年に帰国、24歳で解放の日を迎えていた。小説に描かれたソウルの街の情景はそのままその日の柳氏の心象風景であったのだろう。

実際、「方向感覚を失った幼い蕾たち」は日本人が去った解放後も「日帝の残滓」を引きずった。言葉や習慣といった民族のアイデンティティーの回復（確立）はもとより、植民地期の近代化をめぐる論争、日本の植民地支配に抗い戦った人々と、日本に協力した（させられた）「親日派」といわれる人たちとの葛藤……。その後遺症は解放後 76 年たったいまも消えてはいないのである。

2. 「二宮金次郎は尊敬されていますか」

戦前、理想的な人間像として「文部省唱歌」に歌われた二宮金次郎（本名・尊徳）は、その時代、「筆頭の教科」とされた「修身科」の教科書に登場する代表的な人物だった。どんなふうに教えられたのか。

■一粒のコメ

大戦期の 1942 年、国民学校で使われた文部省発行の『初等科修身 一』（3 年生対象）を見てみる。当時の状況から考えて、盧泰愚少年が使った朝鮮総督府の教科書もこれと同一か、ほぼ同じ内容だったはずである。二宮金次郎は「一つぶの米」という題で取り上げられ、以下のような内容が盛られていた。

▼14 歳のときに父を亡くした金次郎は、母を助けて小さな弟たちの世話をし、家のために働いたが、間もなく母も亡くなった。金次郎の兄弟は別れ別れになってよその家にもらわれていき、金次郎はおじの世話になる。

▼おじの家で金次郎は昼は田畑を耕し、夜は縄をなったりわらじを作ったりした。悲しいこと、つらいことがあっても辛抱した。「家をおこし、国を盛んにするには心を緩めずに働かなければならない」と考えたからだ。

▼金次郎は川端の荒れ地を開いて菜種をまいた。翌春、一面に美しい花が咲き、菜種がたくさん取れた。

金次郎は油屋に頼んでそれを油に代えてもらい、夜の仕事が済むと、その油で火をともし、本を読んだ。

▼大水が出たことがあった。金次郎は荒らされたところをよく耕し、捨てられた稲の苗を集めてそこに植えた。秋、それがよく実って一俵の米が取れた。「一粒の米でも育てていけば、たくさんの米になる。土地も手入れをすれば立派な田になる。怠けると荒れてしまう」。そう考えて金次郎はいっそう精を出して働いた。



「一つぶの米」の挿絵 1942年文部省発行の『初等科修身一』

■忍耐、勤勉、儉約、努力……

内村鑑三（1861～1930年）が明治末年に英語で書いた名著『代表的日本人』でこの人物を取り上げている。

鈴木範久訳の岩波文庫でかいつまむと、次のようだ。江戸後期の1787年、相模の貧しい農家に生まれた。早くに両親を亡くし、伯父のもと、昼は働き、夜も勉強に励んだ。……数年後、生家に戻り、斜面や沼地を次々と切り拓く。やがて、かなりの資産を持つようになり、儉約家、勤勉家と仰がれる。請われて藩主の領地や全国各地の荒廃した村々を救い、最晩年は徳川幕府にも用いられた。

ここでは、忍耐、勤勉、儉約、努力、信念、仁愛、自助、自尊、誠意、道徳、実直といった言葉があふれ、尊徳をめぐるエピソードの数々が具体的に紹介される。一例をとれば、次のようである。

村人の信頼を失った名主が尊徳に知恵を借りに来た。

答えは簡単だった。

「自分可愛さが強すぎる。村人に感化をおよぼそうとするなら、自分のもの一切を村人に与えるしかない。

全財産を売って村の財産にし、すべてを村人に捧げるがよい」

名主は、犠牲が大きすぎると言ってきた。

尊徳は言った。

「よもや自分の家族が飢えるのを心配しているのではあるまい。あなたが役目を果たしているのに、相談役の私が役目を果たさないとも思うのか」

名主は教えどおりに実行した。彼の影響力と声望はただちに回復した。一時の不足分は尊徳が自分の貯えか

ら調達した。まもなく全村こぞって名主を支援するようになり、名主は以前にもまして裕福になった。



二宮尊徳 『代表的日本人』の表紙より

■「施政者に都合のいい人物」

二宮尊徳は植民地朝鮮でも、とくに 1930 年代の「農村振興運動」で、勤儉の模範として農村青年に浸透がはかられた。

この人物をいま、どう見るべきか。人によって評価はさまざまだろう。尊徳が発揮した勤勉、努力、誠意といった価値は尊い。社会のために尽くそうという精神も見習いたい。私自身、そう思う。しかし、それはやはり個々人の問題だろう。国家が強制したり教科書で教えて子らの評価につなげたり、という問題ではない。

あの時代、個人の尊厳を無視し、国家中心の特定の価値観で染め上げた全体主義が、とんでもない方向に突き進んだ。その反省から戦後の日本国憲法は「すべて国民は、個人として尊重される」(第 13 条)とうたいあげたのである。

二宮尊徳が教科書に主流人物として登場してきたのは明治中期以降だった。それについて中村紀久二『教科

書の社会史—明治維新から敗戦まで』(岩波新書)は、次のような指摘をしている。

明治政府が尊徳を尊重したのは、百姓一揆の方法をとらず、決して政治を口にせず、農民自身の勤勉と儉約によって、農村の矛盾を解決した点である(奈良本辰也『二宮尊徳』岩波新書)。勤勉と儉約を強調して農民の生き方を教える尊徳の態度は、いずれの時代の施政者にとってもまことにつごうのよい人物であった。

■二宮金次郎の復活

そんな二宮尊徳が今また、教科書に復活してきた。2006年、第一次安倍政権で教育基本法の抜本改正がなされ、15年の学校教育法施行規則の改正で「道徳」が「特別の教科」に格上げされた。これを受けて18年から小学校、19年から中学校で検定教科書が用いられるようになり、そこに金次郎が登場してきた。従来の「道徳の時間」にはなかった子らの学習成果についての評価も行われている。

どんな内容なのか。例えば、教育出版の小学4年生用『小学道徳4 はばたこう明日へ』は「勤労、公共の精神」の「徳目」と関連して「二宮金次郎の働き」と題する文章が載せられている。概略、次のようだ。

▼金次郎は200年ほど前、いまの小田原市の農家に生まれた。幼いころ、台風の洪水被害で一家の暮らしが苦しくなった。金次郎は懸命に働く両親を助けて朝は山へ薪とりに行き、昼は田畑で働き、夜はわらじをつくり、その合間に勉学にも励んだ。

▼大人になった金次郎は桜町という地域の人々の暮らしを立て直す仕事を頼まれた。金次郎は家々を一軒ずつ訪ね歩いて人々の暮らしぶりを調べ、みんなで働くことのすばらしさを説いた。

▼しかし金次郎のやり方に不満を言う人も少なくなく、思うように進まない。金次郎は一時あきらめかけたが、人々を救うことを第一に考え、10年をかけて人々と田畑や用水を整える仕事を進め、人々の暮らしを豊かにしていった。

▼その後も金次郎は 600 以上もの村の立て直しに尽力した。「一生懸命働いて周りの人や世の中の役に立つこと」。これが金次郎の大切にしていた考えであり、いまでも多くの人々が、金次郎の功績から働くことのすばらしさを学んでいる。

ここには戦前の修身科の教科書の「家をおこし、国を盛んにする」といった言いようはさすがにない。しかしこれは、たとえば特定の価値観の押し付けにつながっていくことにはならない、と言い切れるのだろうか。

■前川喜平さんの警告

「特別の教科・道徳」について文部科学省は「学習指導要領解説」のなかで、特定の価値観の押し付けなどを強く否定。「答えが一つでない道徳的な課題を一人ひとりが自分の問題として捉え、『考える道徳』『議論する道徳』へと転換をはかる」と説明しているようだ。

児童の評価も数値によるものでなく、一人ひとりがどれだけ成長したかを記述式で評価するのだという。本当に大丈夫なのかどうか。

これについて例えば、元文部科学事務次官の前川喜平さん（66）は次のような警告を発している。

学習指導要領に列挙されている徳目を見ると、個人の尊厳や自由の価値にはほとんど触れていない。重視されているのは「我慢する」「わがままを言わない」「自己抑制・自己犠牲を厭わない」「国を愛する」「日本人としての自覚を持つ」「法やきまりを守る」「父母・祖父母、祖先を敬う」といった徳目ばかりだ。

個人や自由の価値には触れず、自己抑制や自己犠牲を美化し、国家や全体への奉仕を強調する道徳は、国家主義、全体主義へと子どもたちの精神を追い込むものになるだろう。

前川さんは、目指しているのは戦前の教育勅語の復活だ、と警戒している。

■重かった盧泰愚さんの問いかけ

「二宮金次郎はいまも尊敬されていますか」

30 余年前、盧泰愚さんが私たち日本人記者団に発した、こんな問いかけは、当時、私が考えていたより、ずっと重かったのである。

3. 「皇国臣民」化と差別化の教育

「中国の異民族同化政策に既視感」

昨年 10 月、朝日新聞のオピニオン面「声」欄に載った見出しである。中国の新疆ウイグル自治区や内モンゴル自治区に住む人たちに対する当局の締めつけは、戦前の日本の朝鮮半島統治とダブって見えるというのである。

「無職 安藤勝志（静岡県 78）」とある投稿者は次のようなことを書いていた。

▼1910 年の韓国併合後、日本は皇民化政策として日本語教育や国家神道による神社参拝を強制。朝鮮民族の抵抗を強大な軍事力で弾圧した。

▼言語や宗教の弾圧は朝鮮半島の民衆のトラウマとなり、その感情は今日も事あるごとに反日的行動として噴出していると感じる。

▼異民族の言語や宗教の自由を奪うことは基本的人権の侵害だ。国家の行うべきことではない。中国は異民族の文化や宗教を尊重すべきだ。

植民地朝鮮で日本がおこなった同化政策、皇民化政策はどんなものであったのか。

■小学校と普通学校

教育が大きな柱であったことはいうまでもない。併合翌年 1911 年に出された朝鮮教育令（第 1 次）は次のような内容を盛り込んでいた。

▼教育勅語の趣旨に基づき忠良な臣民を育成する。

▼時勢と民度に合わせるように（教育を）おこなう。

朝鮮人にも日本人同様、教育勅語に沿った「皇民化教育」をおこなうとする一方で、差別化もするというのだった。後者について初等教育でいえば、朝鮮に住む日本人子弟は内地（日本本土）同様、文部省の国定教科書を使って 6 年制の「小学校」で学んだのに対し、朝鮮人子弟は修業年限 4 年の「普通学校」で、朝鮮総督府の教科書を用いた。

普通学校に行く朝鮮人は多くなかった。学校自体少なかったうえに、民衆の間で「普通学校に入れると、男の子は鉄砲の弾除けにされ、女の子は売春婦にされる」と警戒されたりもしたようだ。

■「一視同仁」

1919 年、朝鮮で憲兵警察による武断政治に反発して「3・1 独立運動」が起きた。日本は軍隊を出動させて鎮圧。この年 8 月 19 日に出された天皇の詔書は次のようなものだった。

「朕夙に朝鮮の康寧を以て念と為し、其の民衆を愛撫すること一視同仁、朕が臣民として秋毫の差異あることなく、各其の生に聊し、均しく休明の沢を享けしめんことを期せり」

分かりやすく砕くと、次のようになるだろう。

私はずっと朝鮮が平穏無事であることを願ってきた。朝鮮の民衆をいっさい差別することなく愛しており、私の臣民であることに少しの違いもない。各人が安心して暮らすことができ、ひとしく私（天皇）の徳を享受できるように、と心に誓っている。

同じ日、首相の原敬は声明で次のように説いた。

朝鮮は日本の版図であって属邦ではない。植民地ではなく日本の延長にある。

■日本語を強要

「3・1運動」後、統治方式は「文化政治」に切りかわり、「東亜日報」など朝鮮語の新聞が許可された。22年の朝鮮教育令（第2次）で制度上、普通学校の修業年限が日本人小学校と同じく6年になり、24年には京城帝国大学が開校した。

しかし、普通学校の場合、実際には4年制のままのところが多く、朝鮮語より「国語（日本語）」の比重が高まった。教師が授業で使う言語も朝鮮語の時間のほかは日本語となった。東京大教授の矢内原忠雄（その後、東大教授を追われ、戦後東大総長）は26年に出した『植民及植民政策』の中で次のように書いた。

私は朝鮮普通学校の授業を参観し朝鮮人教師が朝鮮人児童に対し日本語を以て日本歴史を教授するのを見、心中涙を禁じ得なかった。

■普通学校で入学試験

この時期、朝鮮人の間で教育要求が高まった。朝鮮人の私立学校が抑圧される一方で、総督府の学校も足りなかった。結果、普通学校で入学試験が行われ、志願者の半数以上がふるい落とされた。

京城帝大も朝鮮人にはハードルが高かった。入試では日本の古典など日本人に有利な出題がなされ、初年度24年春に予科に入学できた朝鮮人学生は定員180人中44人だけだった。



1938年3月、朝鮮教育令改正（第3次）。翌4月に国家総動員法の公布を控え、「内鮮一体」の総動員態勢に備えた制度改変だった。普通学校を小学校と名称変更するなど日本との一体化を名目に学校などでの朝鮮語の使用が禁止されていった。

■金時鐘さんの回想

1929 年生まれ、いま奈良県に住む在日詩人、金時鐘さん（93）は濟州島の普通学校でのことを次のように回想している。

はやく立派な日本人になって、天皇陛下の良い赤子になることが何よりも大事なことだと毎日諭されて
いましたから、朝鮮語の授業はまったくもって余計な勉強だったのです。そのような状態のなかで朝
鮮語の授業は「支那事変」〔1937 年からの日中戦争〕が始まった年の二学年いっぱいではなくなりました
が、それまでも朝鮮語の授業は、何かと別の課目になりがちな時間でした。（『朝鮮と日本に生きる
——濟州島から猪飼野へ』岩波新書）

■五木寛之さんの回想

そんな時代に盧泰愚さんは農村部で少年期を過ごした。そこでの朝鮮の少年たちにとって「日本」はどうい
うものであったのか。盧さんと同年 1932 年の生まれで、韓国の農村部で少年期を過ごした作家の五木寛之
さん（88）の回想は当時の空気を伝えてくれている。

五木さんの両親は朝鮮で教職だった。物心ついた時から朝鮮にいて学齢期に達する少し前、辺鄙な村に引
越した。父親がその普通学校の校長に赴任することになったのだった。

恐ろしいほどの寒村だった。私の家の家族を別にすると、日本人は村の駐在所の巡査夫婦だけだった。

……そこでは日本語を使う朝鮮人はほとんどいませんでした。

もちろん、周りに一緒に遊べる日本人の子どもなどもない。その代わりに、地元の子どもたちがよく
遊びにきました。彼らは、私がつまんでいる漫画の本を見せてほしい、とせがむわけです。それで、少し
優越感をもって見せてやったりする。……

私が使うのは日本語だけです。一方、彼らのほうは日本語をほとんど使わない。日本語を強制されてはいても、日本人がほとんど誰もいないのですから、当然、彼ら同士はいつも朝鮮語で話しているわけです。

しかし、一緒に遊んでいるうちに、私もほうも朝鮮語を片言で少しはおぼえますし、向こうも日本語を教えられているので、片言の日本語はわかります。コミュニケーションはさほど問題なかったような気がします。（『運命の足音』幻冬舎文庫）

■徴兵・徴用で義務教育を計画

朝鮮人の就学率は全般的に低かった。総督府の内部文書は朝鮮人学齢児童の就学率について、1911年1・7%▽22年10・2%▽37年30・8%▽42年54・5%——などと記している。ちなみに日本国内のそれは1910年の時点で98%に達していた。

戦時総動員体制下、39年から日本内地への朝鮮人労務動員が本格化し、44年には強制徴用となった。軍事的動員も38年以降まず志願兵募集の形で始まり、44年からは朝鮮人にも徴兵制度が適用された。

42年12月、総督府は朝鮮でも46年から義務教育を実施すると発表した。その時点における朝鮮人の日本語理解率は2割程度とみられていた。日本語が分からない、皇国臣民化教育のなされていない朝鮮人を、たとえば軍隊に連れて行ったら、どういうことになるか——。

日本は太平洋戦争に突入したこの時期に至り、徴兵、徴用の面から朝鮮人の義務教育化に踏み切ろうとしたのだった。それが実施に移される前の45年8月、日本の敗戦によって朝鮮は解放された。（日韓の深淵—盧泰愚さんの時代③につづく）

参考文献

姜在彦『日本による朝鮮支配の40年』朝日文庫、1992年

木宮正史『日韓関係史』岩波新書、2021年

金大中（波佐場清・康宗憲訳）『金大中自伝Ⅰ 死刑囚から大統領へ—民主化への道』岩波書店、2011年

小林慶二『金泳三—韓国現代史とともに歩む』原書房、1992年

趙景達『植民地朝鮮と日本』岩波新書、2013年

佐野通夫『日本植民地教育の展開と朝鮮民衆の対応』社会評論社、2006年

鄭大均『日韓併合期ベストエッセイ集』ちくま文庫、2015年

二宮尊徳（児玉幸多訳）『二宮翁夜話』中公クラシックス、2012年

旗田巍「日本人の朝鮮観」『アジア・アフリカ講座 日本と朝鮮 第3巻』勁草書房、1966年

旗田巍監修『日本は朝鮮で何を教えたか』あゆみ出版、1987年

前川喜平「我慢と自己犠牲を美化する教育勅語のヤバさ／教育勅語が復活すれば子どもが追い込まれる」東

洋経済 ONLINE、2019年1月26日 <https://toyokeizai.net/articles/-/260699?page=4>